

《麻痺》を表す色彩表現

—James Joyceの*Dubliners*—

梅 津 義 宣*

Colour Presentation of “Paralysis”

—A Study of James Joyce’s *Dubliners*—

Yoshinobu Umetsu

Abstract

It might be easy for us present-day readers to underestimate the significance of the style and rhetoric for James Joyce (1882-1941), since formal studies of elastic style and rhetoric have declined.

Joyce’s own language is still particularly traditional and also highly specialized, since he had been highly educated for more than ten years by the Jesuits.

The aim of this paper is to analyze the colour presentation in James Joyce’s *Dubliners* (1916) – rhetorically, stylistically, and symbolically – combined with the author’s own motif “paralysis”.

[Key Words]

colour presentation, colour terms, metaphor, paralysis, rhetoric, simile, style

序 論

*Dubliners*はアイルランド出身の作家James Joyce (1882-1941)によって書かれた短篇集であり、15篇の短篇を収めている。これらの短篇は1904年から1907年にかけて書かれ、そのうちの3篇はアイルランドの新聞に掲載された。Joyceはこの作品 (*Dubliners*) をダブリンの市民たちに突きつけた「鏡」であると言っている。

Joyce自身によると、*Dubliners*は社会の4つの相を描いているという。すなわち、「少年期」(最初の3篇)、「青春期」(続く4篇)、「成年期」(続く4篇)、「社会生活」(続く3篇)であり、最後に“The Dead”が位置付けられている。それぞれの物語で扱われているのは、当時の「一般市民」と呼ばれる階級の人々の《麻痺的な有様》である。ダブリンの市民たちは、「上流」、「中流」、「労働者」の3層に分かれ、「中流」はさらに上、中、下の3層に分かれ、全体として5層の〈ピラミッド〉を形成していた。「一般市民」とはこれらの5層のうちの中流を指すが、Joyceはそのうちでも自分が属していた中流の下層を描いている。

ダブリンにおいては、当時、被支配者階級の人々はさまざまな鬱屈を抱え、《麻痺的状况》に陥っていた。《麻痺》とは人々をとらえている無気力のことである。物語内容は1894年から1904年にかけての出来事であり、《麻痺》(paralysis)という言葉は、Joyceの造語というより

*所属：総合人間科学部 人間心理学科 [英語・英米文学専攻]

は、「赤貧」とか「未耕地」などと同様、アイルランドを評する際の常套語になっていた。《麻痺》の誘因的要素となっていたのは「支配」・「被支配」という職業的関係性のほかに「宗教」の問題があった。宗教に絡む微妙な確執や意識の相違が増長していった時代である。

さらには、1845年から1849年にかけての大飢饉を淵源とし、ローマ・カトリック教会や大英帝国による支配の下、さまざまな構造的歪みがアイルランドの中で噴出していったのである。人口が半減し、人々は生きる力を喪失しかけていた。就職もままならず、結婚事情も最悪であった。こうして、ダブリンの市民たちは無気力に夢想の世界に耽ったり、酒場に逃避したり、狡猾な策略をめぐらしたり、家庭内で暴力を揮ったりするのが日常であった。

当時ダブリンの市民たちを襲ったこのような《麻痺的状况》をJoyceは厳しい修練に基づいた確かな修辞法と独創性ゆたかな文体で書き綴ったのが*Dubliners*である。因みに、種々の経緯を経て本短篇集が初めて出版されたのは1916年で、皮肉にもアメリカにおいてであった。

本論文の目的は、*Dubliners*におけるJoyceの色彩表現を考究することにある。とりわけ*Dubliners*のモチーフである《麻痺》(paralysis)を核としながら「モチーフ・構成・文体」との相互的関連性について実証的に論じてみようと思う。Joyceの*Dubliners*における色彩表現は彼自身の確固たる芸術観に立脚した〈独自の美的効果〉を得るためであり、そのためにこそ彼はあらゆる修辞的・文体的技巧を駆使した、という命題が本考察の根底にある。

1. Brown

Joyceは*Dubliners*のなかで色彩語‘brown’を「生気を欠く状態」や「枯渇」、「衰退」ひいては《麻痺》を象徴的に暗示する言葉として用いている。とりわけ、ダブリン市内の通りやそこに立ち並ぶ家々の表面は、しばしば、‘brown’で彩られる。

- (1)North Richmond Street, being *blind*, was a quiet street except at the hour when the Christian Brothers' School set the boys free. …The other houses of the street, conscious of decent lives within them, gazed at one another with brown imperturbable faces. *Araby*, p. 33.
- (2)Then a man from Belfast bought the field and built houses in it — not like their little brown houses but bright brick houses with shining roofs. *Everine*, p. 42.
- (3)Mr. Duffy abhorred anything which betokened physical or mental disorder. A mediæval doctor would have called saturnine. His face, which carried the entire tale of his years, was of the brown tint of Dublin streets. *A Painful Case*, p. 131.

上記引用文(1)(2)(3)はともにダブリンの通り、ダブリンの家々の様相を描写している。

引用文(1)は、ダブリンの町の中に接近して立ち並ぶ家々が〈褐色の冷厳な顔〉をして互いに見詰め合っていることと〈行き止まり〉を暗示する‘blind’と作品の主調としてしばしば用いられる色彩語‘brown’の二語が連結して用いられるとき「枯渇」「疲弊」さらには《麻痺》をより鮮明に映し出している。

引用文(2)では、“their brown houses”と“bright brick houses with shining roofs”が対照的に描き出されている。どちらも〈煉瓦造りの家々〉には違いはないのだが、「豪華さ」が

全く異なる。もともとダブリンに住む人々の家は、小さな「茶褐色」の古びた住まいである。一方、新たにベルファストからやってきた男がこの町に建てた家はキラキラした屋根の明るい感じの赤い煉瓦造りの家である。この文章では [b] 音の頭韻 (alliteration) [Belfast, bought, built, brown, but, bright, brick] の修辭的技巧が用いられ、音楽的特性を生かしながらより鮮やかに読者の脳裡に《麻痺》の心象風景を描かせる役割を果たしている。同時に、音の連鎖は虚無感をも生み出すことに注目しなければならない。

引用文(3)では、主人公Duffyの顔色がダブリンの通りと同じ「茶褐色」であることが述べられるが、さらに彼の気質が簡潔に、しかも象徴的に説明されている。——肉体や精神の無秩序を示すものは何であれ嫌い、あたかも「土星的 (saturnine)」とも言える気質の持ち主であるDuffy——。ここでは、気むずかしい、陰気な気質 (顔色) とダブリン特有の《麻痺的状况》が色彩語 'brown' のなかで融合していると解釈できるであろう。

さらに、次の引用文(4) (Araby) における 'brown' は、終始一方向的 (盲目的) に進行する儂い恋慕をモチーフにした物語のなかで用いられる。

(4) When she came out on the doorstep my heart leaped. I ran to the hall, seized my books and followed her. I kept her brown figure always in my eye and, when we came near the point at which our ways diverged, I quickened my pace and passed her. This happened morning after morning.

Araby, pp. 34-35.

少年 (Araby) は少女 (Manganの姉) を一途に理想化して自らの心のなかに思い描く。それは、少年が無意識に投影するダブリンのくすんだ「茶褐色」にも示唆されている。理性を持たず自分の感情のなかにのみ閉じ籠もる様な愛情が不毛に終わるのは明白である。Joyceはこのような内向性・自閉的傾向からくる「不毛な様相」のことを《麻痺的状况》ととらえているが、これはArabyやダブリンの市民たちだけに言えることではなく、すべての人類に共通する普遍的傾向である。DublinersのなかでJoyceは単なる「地域性」 (locality) にとどまらず、彼独自の手法を駆使して「普遍性」 (universality) を追求し、文学的価値を高めていると考えられる。

2. Grey

JoyceがDublinersのなかで 'grey' を用いるとき、明らかに「活気のない」・「憂鬱な」などのニュアンスを伝えながら、それぞれ、ダブリン (の市民たち) の《麻痺的状况》を暗示している。

(1) The ^agrey ^bwarm evening of August had descended upon the city and a mild warm air, a memory of summer, circulated in the streets. The streets, shuttered for the repose of Sunday, swarmed with a gaily coloured crowd. Like illuminated pearls the lamps shone from the summits of their tall poles upon the living texture below which, changing shape and hue *unceasingly*, sent up into the ^bwarm ^agrey evening air an *unchanging unceasing* murmur.

Two Gallants, p. 58.

引用文(1)では、色彩語 ‘grey’ が暗示的に象徴する《麻痺》《衰退》《生気の無さ》などのイメージは、Joyceの文体的（修辞法的）な技法によって一層効果的に表現されている。例えば epanodos [‘the grey warm evening’ ; ‘the warm grey evening’] と呼ばれる技法や、nadiplosis [‘the streets. The streets’]、paradox (‘changing’ ; ‘unchanging’)、alliteration [‘coloured crowd’]、さらには assonance [‘shuttered’ ; ‘Sunday’] などの多様な技法である。

(2) In the dark of my room I imagined that I saw again the heavy grey face of the paralytic. I drew the blankets over my head and tried to think of Christmas. But the grey face still followed me.

The Sisters, pp. 11-12.

(3) Aunt Julia was an inch or so the taller. Her hair, drawn low over the tops of her ears, was grey ; and grey also, with darker shadows, was her large flaccid face.

The Dead, p. 221.

上記引用文(2)(3)では ‘grey’ はともに ‘face’ の状態を形容する色彩語となっていることに注目したい。(3)では一部 ‘grey’ は ‘hair’ を形容している(2)では、‘palalytic’、‘dark’、‘heavy’ の語が文脈中に配置され、‘grey face’ は特別な象徴の色合いを賦与されることになる。(3)の ‘grey face’ は ‘darker’、‘flaccid’ の言語的（語彙的）効果の助けを得て独自の映像を読者の脳裡に与えている。‘faccid face’ では [f] 音の反復 (alliteration) が見られる。上記の文章においては、‘grey’ は明らかに「倦怠」「脆弱」「疲弊」などのニュアンスを伝えるもので、これらはひいては、主作品のモチーフ《麻痺》と連結するものである。

3. Dark (Darkness)

Joyceが *Dubliners* のなかで ‘dark’ (‘darkness’) を用いるとき、単に蒼黒の夜陰などを表す暗色としてだけではなく、人間の暗然たる心象風景を描き出す色彩語として用いる場合が多いことに注目させられる。

(1) The career of our play brought us through the dark muddy lanes behind the houses where we ran the gauntlet of the rough tribes from the cottages, to the back doors of the dark dripping gardens where odours arose from the ashpits, to the dark odorous stables, ...

Araby, p. 64.

(2) One evening I went into the back drawing-room in which the priest had died. It was a dark rainy evening and there was no sound in the house.

Araby, pp. 35-36.

上記引用文(1)では、色彩語 ‘dark’ の同語反復が場面描写のために効果的に用いられている。冬の夕べの暗さ、陰気、冷気と湿気が立ち込めている様子をより現実的に描写するために、この反復の手法は作為的に用いられているとも理解できるだろう。このように反復され、強調される形容詞 ‘dark’ は、同時に、近くで投げかけられる「街灯の弱々しい明り」の存在を仄かに浮き彫りにする効果をももたらしている。言い換えれば、このような反復の手法によって、物語のモチーフに関わる体系のなかで、ある種の有機的な役割が賦与されるのである。

引用文(2)では、「祭司の死」と「静寂」「暗がり」とが連結し、主人公の内面的な「暗黒」・「暗澹」をも暗示している。さらに、引用文(3)を引用する。

(3) Yes, the newspapers were right : snow was general all over Ireland. *It was falling on every part* of the dark central plain, … *falling softly* upon the Bog of Allen and …, *softly falling* into the dark mutinous Shannon waves. *It was falling*, too, *upon every part* of the lonely churchyard on the hill where Michael Furey lay buried. It lay thickly drifted on the crooked crosses and headstones, on the spears of the little gate, on the barren thorns. His soul swooned slowly as he heard the snow *falling faintly* through the universe and *faintly falling* like the descent of their last end, upon all the living and the dead.

Dead, p. 278.

引用文(3)は、“The Dead”の終結部をなすパラグラフである。ここでは、色彩語‘dark’が色調の「核」として位置付けられながら、Joyce独自の作為的とも言える巧妙な文体的技法によってそれぞれの文が編まれている。……雪は暗い中央平原にも、木の生えていない丘陵にも、暗く騒ぎたてるシャノン川の波の上にもやさしく降り、またMichael Fureyが埋葬されている丘の上の淋しい教会の至る所にも降っている。歪んだ十字架や墓石の上にも、そして小さな門の槍の先にも、不毛な茨の上にも雪は厚く降り積もっている……と描かれ、不毛性・死・暗鬱などのイメージを漂わせながら読者を本作品の最終結部にまで誘ってゆくのである。そこは人間が知覚を次第に失ってゆく茫然とした幻想的宇宙空間であり、《麻痺》の世界である。また、そこは〈死者たちの世界〉そのものに他ならない。さて、ここではJoyceが用いている文体的技法をまとめておきたいと思う。alliteration : [crooked crosses / soul swooned slowly … snow / descent … dead], apanados : [‘falling softly … softly falling’ / ‘falling faintly … faintly falling’], assonance : [thickly drifted / soul … slowly … snow]、さらには‘lay’の反復 (polyptoton) も見られる。これらの音声的反復 (あるいは交叉) を主体とした技法は明らかに作為的なものであるが、Joyceは、抒情的、叙事的、劇的な発展のなかに展開するモチーフ描写の理論と技法を自然な形で結び合わせ、溶け合わせている。このようなJoyceの技法と理論の密接な結合はDubliners以降の諸作品にも投影され続けることになる。

(4) Nearly all the stalls were closed and the greater part of the hall was in darkness. I recognised a silence like that which pervades a church after a service. *Araby*, p. 40.

(5) Gazing up into the darkness I saw myself as a creature driven and derided by vanity ; and my eyes burned with anguish and anger. *Araby*, p. 41.

引用文(4)では、バザーの後のホールの「暗闇」(「邪悪」)と礼拝の後に教会を包み込む「静止・沈黙」とが互いに〈似たもの〉として主人公に認識される。世俗の典型とも言えるバザーの‘darkness’と神聖なる場所(教会の礼拝堂)の‘silence’の対照。これらの想像の連結する比喩的表現を支えているのはJoyceの冷静な視線であり、また調刺的精神に他ならない。

引用文(5)は‘Araby’の終結部である。この部分は文字通り、真のクライマックスとなって主人公の少年の変化に富んだ体験の明確な結末に到達する。Joyceは物語の結びとして、敏速に、迫力をもって少年の複雑な内面に決着を与えている。ここに描き出される少年の内的反応は強烈である。突如、暴力的とも言えるような反応が表われ、その様相を確実に伝えるかのように文章は音韻的反復 [alliteration : darkness, driven, derided / anguish, anger] を用い、力強いリズムを醸し出している。少年は「静止」と「暗黒」を、もの憂い悠長な諦念の

なかで受容するのではなく、「暗闇」と「拒否」に対する激しい怒りを爆発させることによって受け止めたのである。少年の「怒り」は「苦悩」に通じるものであり、その意味で、この物語は「少年の道の探求はここで終結してはいない」と読者に暗示している。人間が本来たどるべき道は、主人公の少年にのみ問いかげられるものではなく、すべての人間が等しく普遍的に尋ね求められていくべき課題であると読み取るべきであろう。

4. Golden

これまで述べてきた多くの事例にも共通して言えることであるが、「色彩語+名詞」がセットになって比喩の媒体となる場合が少なくない。この‘golden’の項で示すそれぞれの引用文においてもその点で共通する。

さて、色彩語としての‘golden’の持つ「華麗」「絢爛」のイメージは、本来の「黄金の価値の大きさ」が織り重なってその印象を一層強めるのが一般的である。しかし、Joyceは‘golden’のイメージを逆転させ、むしろ《人間の終末(死)》とか《退廃》、《衰退》、ひいては《麻痺》すらも象徴している。

- (1) I went in on tiptoe. The room through the lace end of the blind was suffused with dusky golden light amid which the candles looked like pale thin flames. He had been coffined. *The Sisters*, p. 15.

上記引用文(1)で注目したいのは、「ブラインド(‘blind’:この語も*Dubliners*のなかでは象徴的な意味を持つ)の縁から差し込む夕暮れの黄金色の陽で溢れる部屋」と「棺におさめられたあの人の亡骸の側で灯る青白く弱々しい蠟燭の焰」の対照である。ここでは、もはや、‘golden’は、歓喜や幸福感などを象徴する色彩語として位置づけられることはない。‘golden’の持つ「落日の儂ない輝き」は、‘blind’、‘dusky’、‘pale’、‘coffined’など、すなわち「生の行き止まり(‘blind’)」、「終末」などを暗示する数々の言葉に既に飲み込まれてしまっている。

- (2) The glow of a late autumn sunset covered the grass plots and walks. It cast a shower of kindly golden dust on the untidy nurses and decrepit old men who drowsed on the benches ; ...

A Little Cloud, p. 85.

- (3) The golden sunset was waning and the air had grown sharp. A horde of grimy children popwated the street. They stood or ran in the roadway or crawled up the steps before the gaping doors or squatted like mice upon the thresholds. *A Little Cloud*, p. 85-86.

晩秋の黄昏。黄金色の夕陽。引用文(2)(3)の‘golden’は、この語が本来持っている歓びや美しさのイメージを保ちながら、一方では、‘untidy’ ‘decrepit’ と対照の関係を持っている(引用文(2))。また、引用文(3)では、‘waning’、‘grimy’、‘squatted like mice’などの言語表現に対して色彩語‘golden’は対極の次元の言葉として位置付けられている。‘golden’の持つ「華美」「絢爛」「歓喜」「繁栄」などの陽画的イメージは、この夕暮れのダブリンに生きる市民たちの赤裸々な姿(陰画的イメージ)と対照の関わりを保ちながら、読者の脳裡に一層鮮やかな心象風景を映し出させることに成功している。またここでは、「陰画」と「陽画」が

主客転倒していることも注目に値するところである。

5. White

色彩語 ‘white’ の持つ一般的なイメージは、「潔白」「新鮮」「清潔」「純潔」「無垢」「淡白」などである。Joyceは*Dubliners*のなかでは ‘white’ に「脆弱」のイメージを賦与しながら用いることが多い。もちろん、このイメージは究極的には《生命の衰退》や《麻痺》などを暗示することにもなる。

(1) His Hands were white and small, his frame was fragile, his voice was quiet and his manners were refined. *A Little Cloud*, p. 84.

(2) After that they lived apart. She went to the priest and got a separation from him with care of the children. She would give him neither money nor food nor house-room ; and so he was obliged to enlist himself as a sheriff's man. He was a shabby stooped little drunkard with a white face and a white moucetache and white eyebrows, pencilled above his little eyes, which were pink-veined and raw ; ... *The Boarding House*, p. 73.

引用文(1)は“*A Little Cloud*”の冒頭部の一節である。ここには主人公の彼、‘Little Chandler’の容姿などが映し出されるが、「手は白く、小さい」「声はやさしい」「物腰は上品である」と説明される。この物語のモチーフと脈絡・構図を考えれば、“Little Chandler”の人物像は、姿のサイズの「小ささ」ではなくて、むしろ、「心の細やかさ」ひいては「心の小ささ」「小心」のイメージによって描写されているとすることができる。ここで用いられる色彩語 ‘white’ は、そのような主人公のイメージづくりに一つの役割を果たしている。(この物語の終結の場面では「ダブリンの市民の精神的麻痺の症状」が凝縮して描き出されることになる。)

引用文(2)は、Joyce独特の筆力によって迫力ある作品としての定評をもつ“*The Boarding House*”の冒頭の一節である。かつて肉屋商売を営んでいた夫婦 (they) が登場する。Mrs MooneyとMr Mooneyである。夫であるMr Mooneyの生活が狂い出し、肉切り包丁をもって夫人に立ち向かうという事件が起こる。はっきりと決断を下すタイプ的女性であるMrs Mooneyは司祭に訴え、別居の許可を取りつける。そして、肉屋商売から〈得られるだけの金〉をまとめて、ダブリンの中央に位置するハイドック街に下宿屋を開く。一方、夫のMr Mooneyは、「みすばらしい、猫背の飲んべえ」に変わり果ててゆく。引用文(2)は、その時のMr Mooneyの様相を描き出している。ここでは明らかに、色彩語 ‘white’ の反復 (polyptoton) が人物の有様を読者の連想の網目に一種の強調の効果をもって焼き付ける役割を果たしている。ここで用いられる ‘white’ は「墮落による失墜」「成れの果て」「見すばらしさ」「脆弱」などのイメージを与えるものとして位置付けられる。このイメージは、Mrs Mooneyの「人間関係を意のままに切り裁き左右することのできる」手際の良さ、遅しさ、辣腕、巧妙さのイメージとは対照的な次元にある。

- (3) 'Eveline! Evy!' He rushed beyond the barrier and called to her to follow. He was shouted at to go on but he still called to her. She set her white face to him, passive, like a helpless animal. Her eyes gave him no sign of love or farewell or recognition. *Eveline*, p. 48.

引用文(3)は“Eveline”の最終場面。ブエノスアイレスに向けて新しい旅立ちをしようとするFrankと、彼を見送るEvelineの様子が比喩的な表現を通して映し出される。Evelineは「無力な動物 (a helpless animal)」に喩えられるが、これは、彼女が極度の恐怖のために麻痺的状态に陥っていることを暗示している。(だからと言って、人間らしさを全く失ったと記している訳ではない。)「白い顔」の‘white’は、愛も、別れも、挨拶の印も表わすことのないEvelineの「硬直した麻痺・無気力」を象徴していると言っていることができるだろう。それはダブリン特有の硬直した「柵 (しがらみ)」と「呪縛」に起因する《麻痺》でもある。

6. Black—White

「芸術家が部屋を描くことはその部屋の住人の心を描くのにも等しい」といった趣旨の言葉がある。もしこのような見解に従えば、“A Painful Case”の冒頭部のMr James Duffyの部屋の描写は、彼の内的状況の見事な解説でもある。

He had himself bought every article of furniture in the room : a black iron bedstead, an iron washstand, four cane chairs, a clothes-rack, a coal-scuttle, a fender and irons and a square table on which lay a double desk. A bookcase had been made in an alcove by means of shelves of white wood. The bed was clothed with white bed-clothes and a black and scarlet rug covered the foot. A little hand-mirror hung above the washstand and during the day a white-shaded lamp stood as the sole ornament of the mantelpiece. The books on the white wooden shelves were arranged from below upwards according to bulk.

A Painful Case, p. 130.

彼の部屋は黒色と白色を基調としている。装飾品とおぼしきものもほとんどなく、鉄製品を主体としている。それは彼の禁欲的な修行僧のような心理の顕れとも理解できるものでもあり、また一方では、この物語の中程に記される「Mrs Emily Sinicoを轢死させる蒸気機関車」の暗示とも読むことができる。上記引用文のなかで、ただ一つの例外は「黒と深紅の膝掛け」(a black and scarlet rug')であり、これは情熱の微かな存在を示す証のように読み取ることができる。しかし、痛ましいことに、その情熱もMrs Sinicoを受け容れるのに充分ではない。この物語の終結部で描き出される「火の頭をした虫のように」('like a worm with a fiery head' (p. 143)) 暗闇のなかを一心不乱にくねくねと進む機関車・貨物列車は、情熱的であったMrs Sinicoの姿を投影していると考えられる。Mr DuffyはMrs Sinicoとの不義密通を敢行することもなく、“the Maynooth Catechism”の戒めを忠実に守り、さらには世間から隔絶し、自分だけの静謐な空間を固持しようとしたことは確かである。このようなMr Duffyの頑なで二元論的な生き方をJoyceは「黒と白」の〈モノクローム〉の世界のなかで暗示しているとも思われる。自分の空間における安住というよりも、自らが陥ってしまった自己矛盾の様相が象徴的に映し出されている。これもまた《麻痺的状况》の一つの顕われである。

7. Green

‘green’ は一般に文学・芸術に関するさまざまなジャンルでは、「活気のある」「若々しい」「新鮮な」「みずみずしい」などの〈生气に溢れる有様〉を顕す場合が比較的が多い。しかしながら、*Dubliners* においては、その逆で、生气を喪失し退廃的な象徴性を帯びた状況を呈する例も少なくない。煩を避けて、以下に2例を引用する。

(1) It may have been these constant showers of snuff which gave his ancient priestly garments their green faded look for the red handkerchief, blackened, as it always was, with the snuffstains of a week, with which he tried to brush away the fallen grains, was quite inefficacious. *The Sisters*, p. 13.

(2) He came along by the bank slowly. He walked with one hand upon his hip and in the other hand he held a stick with which he tapped the turf lightly. He was shabbily dressed in a suit of greenish-black and wore what we used to call a jerry hat with a high crown. He seemed to be fairly old for his moustache was ashen-grey. *An Encounter*, p. 27.

引用文(1)で「語り手」は、古びた司祭服が「色褪せた緑色」と表現している。嗅ぎ煙草の粉がこぼれた染みで黒ずんでしまったハンカチ。享年75歳にして召天したJames Flynn司祭への「語り手」の追憶には生氣のない《麻痺》の臭いが漂っている。

そもそも‘green’はアイルランドの象徴であり“the Green Knight”に投影される若々しさをも暗示する色彩語である。同時に‘green’は“An Encounter”で少年(I)が遙かな国を夢見るときに漂うロマン溢れる色調でもある。冒険に出かけるときに、少年が道端で目にする木々の葉は爽やかな緑色である。しかし、それとは対照的に、その直後、引用文(2)に登場する正体不明の変態の老人のみすぼらしい服は、‘greenish-black’であり、口髭の色が‘ashen-grey’であることを合わせて考えても、この情景にも明らかに《麻痺》の色合いが醸し出されている。またここでは、色調を描く複合語の連続的使用(‘greenish-black’; ‘ashen-grey’)もその役割を確実に助けていると言えるだろう。

8. Yellow

‘yellow’に関する一般的連想は「明快・澁刺・希望」などであり、爽やかな明るい絵画的なイメージで用いられることの多い色彩語である。しかし、Joyceは*Dubliners*のなかで、前述の‘brown’とならんで明らかに《枯渇》《衰退》《欠如》ひいては《麻痺》を暗示する色調として‘yellow’、‘yellowing’を用いている。

(1) The former tenant of our house, a priest, had died in the back drawing-room. Air, musty from having been long enclosed, hung in all the rooms, and the waste room behind the kitchen was littered with old useless papers. Among these I found a few paper-covered books, the pages of which were curled and damp: *The Abbot*, by Walter Scott, *The Devout Communicant* and *The Memoirs of Vidocq*. I liked the last best because its leaves were yellow. *Araby*, p. 33.

(2)Home ! She looked round the room, reviewing all its familiar objects which she had dusted once a week for so many years, wondering where on earth all the dust came from. … And yet during all those years she had never found out the name of the priest whose yellowing photograph hung on the wall above the broken harmonium beside the coloured print of the promises made to Blessed Margaret Mary Alacoque. *Eveline*, p. 43.

「語り手」である主人公・少年(I)の家の奥の客間で司祭は死を迎えた。引用文(1)の「かび臭い空気」は周囲のよどんだ状況を暗示し、同時に司祭の生命の息吹きが停止した意味にも通じる。少年は、片隅の反古紙のなかに、司祭が遺していった本を見付け、中でも紙質の黄色い本が一番好きだと言う。ここの文脈では、‘died’、‘enclosed’、‘useless’、‘curled and damp’などの所謂「否定的」な雰囲気感を漂わせる語群と一緒に（その延長線上に）‘yellow’が位置付けられている。‘yellow’は、ここでは、明らかに「生氣のない枯れる色」、「生命の衰退を表現する色彩」として使われている。さらに、司祭の死はダブリンの町の精神的枯渇（麻痺）をも象徴していることに注目したい。

引用文(2)は、自分に恋慕の想いを寄せる青年Frankの「夢」（ブエノスアイレス）への旅立ち・移住と「自分も家を捨てて外国に出てゆくこと」の狭間に立つ主人公Evelineの内面的な状況を描いている。注目したいのは、この物語の第2～4節だけでも“home”と“house”が10も回繰り返され、Evelineの想いの焦点は「家」に在ることが読める。引用文（第3節）の冒頭は“Home !”という強烈な言葉で始まる。「家」の重みを再認識する睡間である。第2節の文末が“… to leave her home”というように“home”で終わり、次いで第3節の文頭に同語を“Home !”と配置している。これはanadiplosisの技法で、ここではEvelineの胸中に深く刻まれている「家」の存在が鮮明に浮き彫りになっている。「外へ」か、それとも「内に」か、の選択に迫られ戸惑い苦悩するEvelineの姿——。当時ダブリンの宗教的支配者（多数派）であったローマ・カトリック教会は、市民たちが国外に移住することを拒む傾向があった。またこの時代には、父権が強化され、女性の役割は「家」に在るという意識が高まり、それを政治権力が巧みに利用したことも事実である。ただ、Evelineの逡巡はこのような宗教的・政治的な動きによるものではなく、「家」に対する愛着によるものであったことは明白である。歳月にわたって馴染んだ「わが家」を見詰めなおし、二度と見ることはないのだろうかと思悩むEvelineにとっては、「壊れた足踏みオルガン」、「福者Margaret Mary AracoqueへのJesusの約束を描いた色刷りの版画」、それに「(日毎に)黄ばんでゆく司祭の写真」は、それぞれ特有の象徴的な意味合いを帯びながら、自分と「家」・「家庭」を一層強く縛り付ける〈絆〉となっている。17世紀フランスの實在の修道女Aracoqueの伝説はEvelineと重なることは一目瞭然である。両者の家庭環境が似ているだけでなく、AracoqueとJesusとの邂逅は、EvelineとJesusとの邂逅に対応している。言い換えればEvelineの宗教的体験を映し出した画像としてこの「色刷りの版画」がこの部屋に掲げられている。〈壊れた〉足踏みオルガンも〈黄ばんでゆく〉司祭の写真も明らかに《衰退》《脆弱》を示唆している。この写真の司祭はいまメルボルンにいる。その意味では、彼はEvelineがFrankと海外に出て新しい人生を切り開くことの象徴とも言える人物である。しかし、この物語の終末を見れば解るように、EvelineはFrankの切なる呼び声に耳を傾けることなく、ダブリンに止まる道を選び取る。「新しい人生の開拓」とか「主体性を持った自立」といった道を歩み切れないEvelineの置かれた立場は、決して個

人的なものではなく、同時代のダブリンのほとんどの女性が陥っている《進行する麻痺状態》という苦境を表わしていると言えるだろう。また、この‘yellowing photograph’の表現一つとっても、Joyceの〈この物語のモチーフに対する精微な技巧的なこだわり〉と〈普遍的な説得力を持たせようという執拗な含蓄の籠め方〉が凝縮されているようにも窺える。

結 語

James Joyceの短篇集*Dubliners*のなかにそのモチーフとして揺がぬ一貫した位置を占める《麻痺》の文学的様相を確かなものにしたという趣旨で書き綴ったのが本論文である。本研究は、モダニズム文学作品の代表的作品である*Dubliners*への文学的接近である。言うまでもなく、本研究は、19世紀から20世紀初頭にかけての 아일랜드の社会、文化状況を記したさまざまな参考文献の助けを借りて知ったことが基盤になっている。この時代を端的に特徴付けるならば、「アイルランドの国民党の総裁 Charles Stewart Parnell (1864-91) を中心とするアイルランド自治独立運動の挫折による（政治的には）暗い谷間の低迷期であったし、カトリシズムと暗黒政治が癒着することによって、奇妙な父権主義が国民の意識のなかに植え付けられ、女性は虚脱と麻痺の入り混じった状態で只管に家・家庭に意識を向けざるを得ない時代」でもあった。（一方では、William Butler Yeats (1865-1939) などのように、そのような政治的挫折などからくる麻痺状態をセンチメンタルな民族運動によって解消できるかのように錯覚しつつ一定の文芸復興の上昇期へと人々を導いた芸術家たちの存在をも記憶しておくべきであろう。）

ともあれ、Joyceの*Dubliners*は、「麻痺した民族の魂」の実態を描くものとして読み解かれてゆくべき作品であろう。具体的には、聖職者の頹廢、政治的指導者の欠如、アイルランドの半植民地的状況、外国への憧憬と文化的低迷などが暴き出される。さらには、「生きながらの死」を扱う作品として“A Painful Case”と“Eveline”が俎上に載る。最後の作品“The Dead”は他の14篇から切り離すべき異質的価値のある作品と評価する批評家も少なくない。つまり“The Dead”は、Joyceが外的世界の模写と訣別し、「言葉の世界」確立へ向う転捩点を示す作品と位置付けられている。

拙論の「序論」のなかで、「*Dubliners*における《麻痺》の文学的様相を確かなものにするのが本論文の目的である」と記したが、筆者はこの目的達成の手掛りの一つとして「色彩表現」を用いた。数ある色彩表現のなかから、とりわけ本作品のモチーフである《麻痺》と関連のあるものを選び抜き、それぞれの作品の構図・文脈・文体的手法（技巧）などを絡めながら考察を継続してきた。

*Dubliners*を構成するそれぞれの作品（物語）において一貫して流れる《麻痺》のモチーフが如何なる文体によって描き出されるのか。——これが筆者のここ数年にわたる課題であった。修辭的表現の特異性を主に考察してゆく延長線上に〈色彩表現〉の研究の必要性を覚えたと言ってもいい。あくまでもモチーフとの関連の中で〈色彩表現〉がいかになされ、読者の脳裡にそれぞれの心象風景をいかに映し出すことができるかが問題となってくる。作者は、当然、その効果を狙いとして作品を書き、読者もまたその効果の恩恵に浴してそれを読むことにもなる。

Joyceは巧みな（作為的な）表現の方法を駆使して、例えば「黒対白」「明対暗」「暖かさ対冷たさ」「聖対俗」などの〈二項対立的シンボル〉としての「相克」を読者に提示している。

*Dubliners*において、作者Joyceは本作品に底流する「相克」と《麻痺》の水脈を見事に掘りあて、読者の共鳴と感動を誘うのである。

[付記]

- ・ TextはJames Joyce, *Dubliners* (London : Grant Richards Ltd. Publishers, 1914) を使用した。
- ・ 本論文中的引用文における下線は、色彩語を明示するために筆者が施したものである。同様に引用文（あるいはその一部分）をイタリック体に直した箇所があるが、それは主に文体的（修辭的）特徴のある部分を明示するために筆者が行ったものである。

Bibliography

- (1) Cheryl Herr, *Joyce's Anatomy of Culture* (Illinois : University of Illinois Press, 1986)
- (2) Herbert Read, *English Prose Style* (1952 ; rpt. Boston ; Beacon Press, 1963)
- (3) J. Mitchell Morse, *The Sympathetic Ailien : James Joyce and Catholicism* (New York : New York University Press, 1959)
- (4) Kate Wales, *The Language of James Joyce* (Sheffield · London : University of Sheffield & Macmillan Education Ltd., 1992)
- (5) Morris W. Croll, *Style, Rhetoric, and Rhythm* (Ed. by J. Max Patric and Robert O. Evans, with John M. Wallace and R. J. Schoeck) (Princeton · New Jersey : Princeton University Press, 1966)
- (6) Patrick Parrinder, *James Joyce* (1984 ; rpt. Cambridge, New York, New Rochelle, Melbourne, Sydney : Cambridge University Press, 1982)
- (7) Richard Brown, *James Joyce and Sexuality* (1985 ; rpt. Cambridge : Cambridge University Press, 1998)
- (8) Richard Ellmann, *James Joyce* (New & Revised Edition) (Oxford · New York · Tronto · Melbourne : Oxford University Press, 1982)
- (9) Seizo Sukagawa, *A Historical Study of English Colour Terms — Meaning, Metaphor and Symbolism —* (Tokyo : Seibido Press, 1999)
- (10) Stanley Sultan, *Eliot, Joyce & Company* (New York · Oxford : Oxford University Press, 1987)
- (11) Susan Stanford Friendman ed., *Joyce — The Return of the Repressed —* (Ithaca : Cornell University Press, 1993)
- (12) Sydney Bolt, *A Preface to James Joyce* (1981 ; rpt. Longman · London · New York : Longman Group UK Limited, 1992)
- (13) Thomas F. Staley, *An Annotated Critical Bibliography of James Joyce* (New York · London · Tronto · Sydney · Tokyo : Harvester Wheatsheaf, 1989)
- (14) Vicki Mahaffey, *Reauthorizing Joyce* (Gainesville · Tallahasser · Tampa · Boca Raton · Pensacola · Orlando · Miami · Jacksonville : University Press of Florida, 1995)